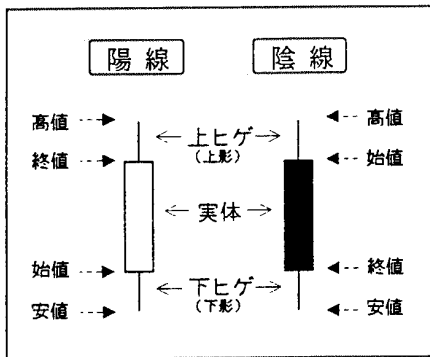


ローソク足

一見してローソクの様な形をしていることから、この名称があります。始値と終値により示される「実体」と、高値と安値による「ヒゲ(影とも呼ばれる)」で形成され、高値引けを陽線引け、安値引けを陰線引けといいます。ローソク足はその期間(日、週、月)の始値・高値・安値・終値の動きを視覚的にとらえたもので、月足であれば月間の相場の動きが一本の足に集約されていることとなります。なお、ローソク足の形状から多くのことを知ることができます。例えば寄り付きの水準から一時、大幅に下落した後で大きく反発した時には、大きな下ヒゲ(下影)を形作るため、下値抵抗が強いと判断します。また、何本かの陰陽線の組み合わせで地合いの強弱を判断する「酒田罫線」は伝統的なローソク足の見方として広く普及しています。

ローソク足の構成



ローソク足の形で強弱を知る

線の形態									
線の呼び方	大陰線	大陽線	小陰線	小陽線	上ヒゲ陰線	上ヒゲ陽線	下ヒゲ陰線	下ヒゲ陽線	寄り同事線
線の性質	非常に弱い線	非常に強い線	弱保ち合い	強保ち合い	弱い線	弱い線	強い線	強い線	転換暗示の線

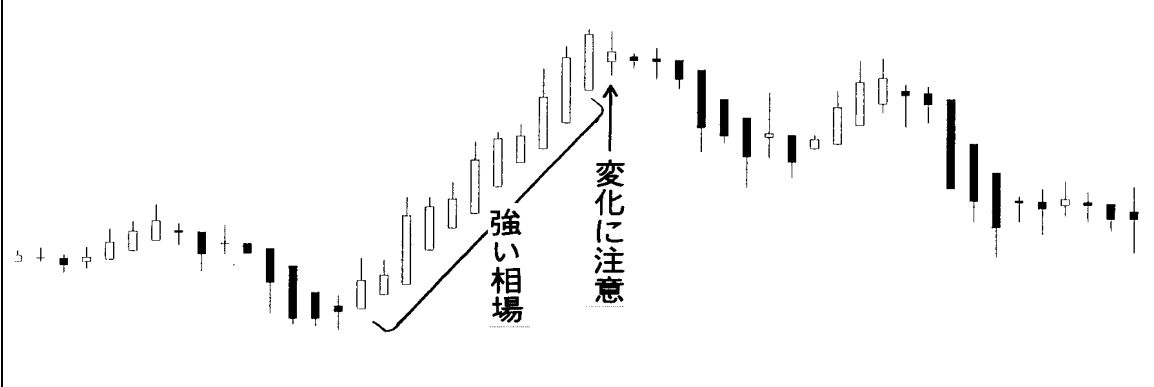
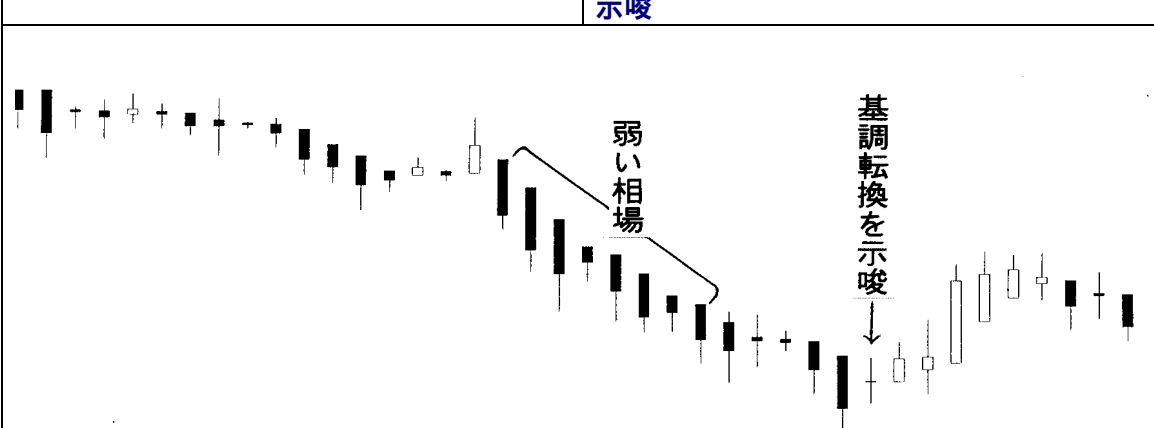
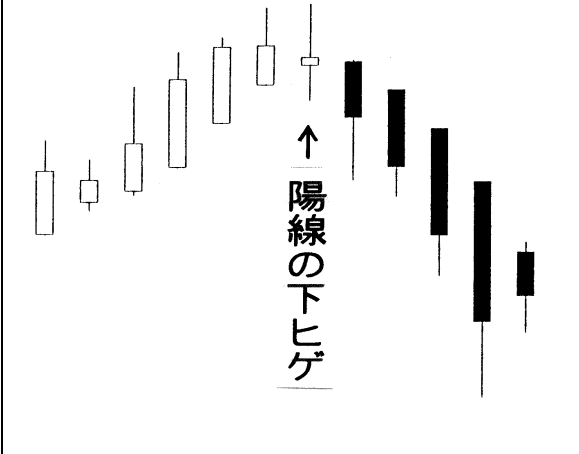
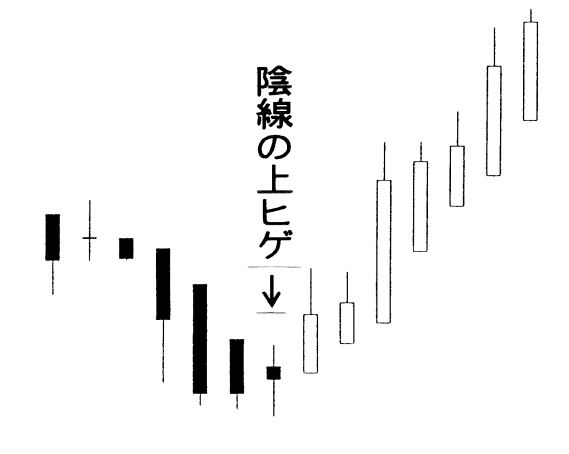
代表的なローソク足の組み合わせ

	かぶせ線 終値が前日の陽線の中心値より下に位置すれば途転売りの急所。再び高値を抜けば買いませ。		はらみ線 売買が拮抗し短期的に相場が一服している状態。はらみ線が寄り同事の場合、基調転換を暗示。
	つつみ線 高値圏で大陰線がつつむと天井を暗示。底値圏では大陽線出現で底値暗示。		たすき線 決定的なパターンではないが直前までの相場の動きを一時的に止める力を持つ。
	星 相場の分岐点であることを示し、上昇過程ならば上放れの前兆を暗示。		A - 宵の明星 下降への転換サイン B - 明けの明星 底入れ・反転のサイン。

当該資料は一般的なチャートの見方を紹介するものであり、売買の判断など、実際のお取引に関してはお客様ご自身の判断で行ってください。

平均足

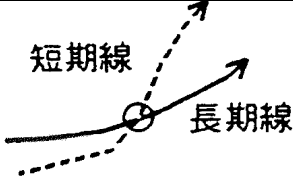
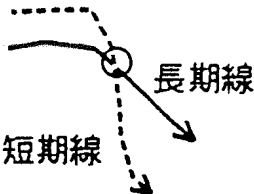
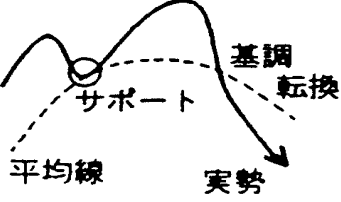
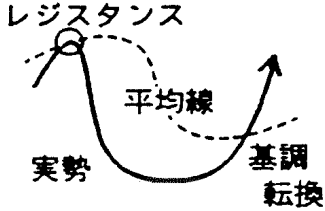
前日のローソク足の実体の中心値を始値とし、当日の始値・高値・安値・終値の各データを平均化した数値を終値とした上で、ローソク足にひき直したものです。日々の相場の動きに現れる突発的、一過性の動きである「ノイズや振れ」を取り除き、全体の長れを把握しようとするものです。

<p>下ヒゲのない陽線で強い相場</p>	<p>前日の実体より短い実体は変化に注意</p>
	
<p>上ヒゲのない陰線で弱い相場</p>	<p>上下にヒゲのある寄り同事線は基調転換を示唆</p>
	
<p>陽線の下ヒゲは売りを示唆 (下ヒゲが長いほど弱い)</p>	<p>陰線の上ヒゲは買いを示唆 (上ヒゲが長いほど強い)</p>
	

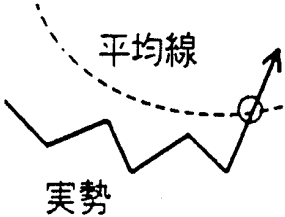
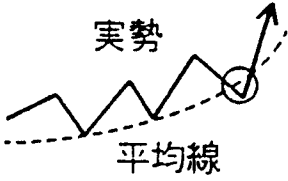
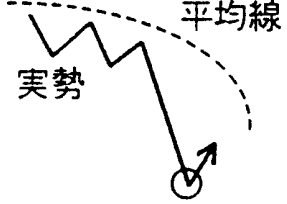

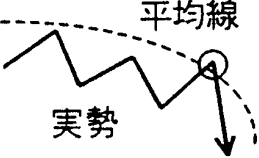
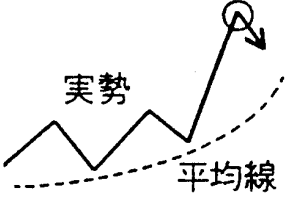
当該資料は一般的なチャートの見方を紹介するものであり、売買の判断など、実際のお取引に関してはお客様ご自身の判断で行ってください。

移動平均線

価格データ（通常は終値）を平均化することで、相場の方向性や行き過ぎの反動などを読み取ります。基本的には移動平均線が上昇を継続している場合や、移動平均線が相場をサポートしている時は、強気相場を示します。また、通常は短期線と長期線の2種類の移動平均線を引き、短期線が長期線を上抜くゴールデン・クロスが現われた場合は、強気への転換確認シグナルとされます。下げ傾向の場合はこの逆の動きとなります。

移動平均線のクロス・支持（サポート）と抵抗（レジスタンス）	
ゴールデン・クロス（強気転換）	デッド・クロス（弱気転換）
	
支持（サポート）	抵抗（レジスタンス）
	


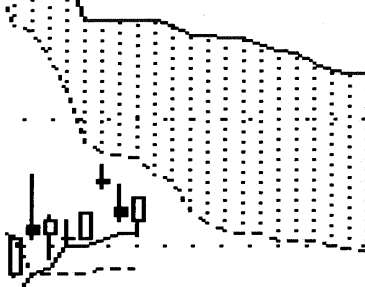
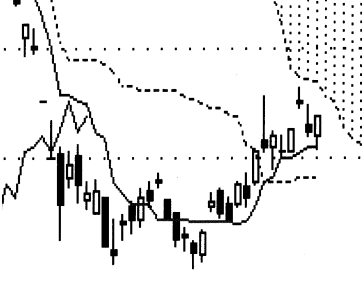
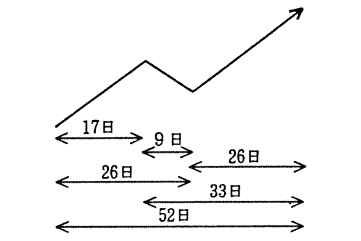
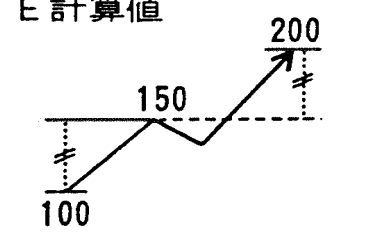
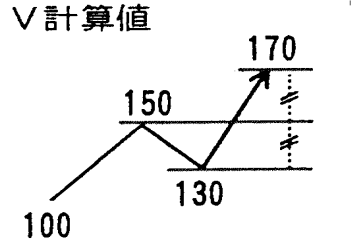
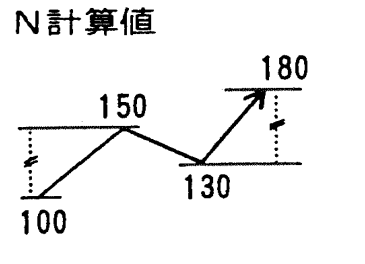
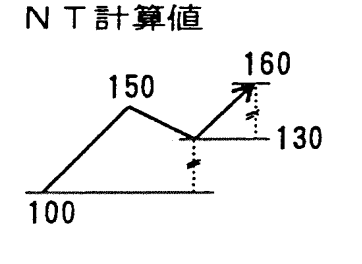
売買シグナル

買いシグナル		
実勢が平均線を上抜く	平均線の支持を確認	平均線との下方乖離が拡大
		
売りシグナル		
実勢が平均線を下抜く	平均線抵抗化で突破に失敗	平均線との上方乖離が拡大
		

当該資料は一般的なチャートの見方を紹介するものであり、売買の判断など、実際のお取引に関してはお客様ご自身の判断で行ってください。

一目均衡表

相場を価格と時間と値幅で立体的にとらえようとしたもので、この名称が示すとおり、一目で相場のバランスを把握しようとするものです。独自の計算により求められた基準線と転換線、2本の先行線から形成される「雲」と呼ばれる抵抗帯、相場実勢を26日前に記した遅行線、そして波動理論と基本数値による変化日の追求など、その見方、売買判断の取り方には非常に奥深いものがあります。

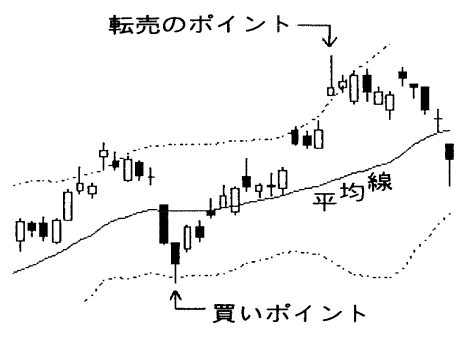

基準線と転換線	雲（先行線）	遅行線
		
<p>実勢に絡み付くように動いているのが基準線（点線）と転換線（実線）。基準線は過去26日間の高値・安値の中間値。転換線は過去9日間の高値・安値の中間値と基準線との中間値。転換線が基準線の上位に位置していれば買い有利とされる。</p>	<p>雲の様に実勢の先に横たわっているのが雲と呼ばれる先行線。基準値と転換値の平均を26日先行させた線と過去52日間の高値・安値の中間値を26日先行させて記した2線によって構成。相場が雲の上位にあれば買い有利。下位は売り有利。</p>	<p>相場の引け値を26日遅行させて記したものが遅行線。遅行線が26日前の相場より上位にあれば買い有利とされる。遅行線は重要な指標とされている。</p>
基本数値と対等数値	波動理論（計算値）	
	<p>E計算値</p> 	<p>V計算値</p> 
<p>先験的に存在する相場の変化日につながる数値。</p>	<p>第1波の上昇幅を第1波の天井に加えた水準。</p>	<p>第1波の終点から押しした値幅を第1波の天井に加えた水準。</p>
	<p>N計算値</p> 	<p>NT計算値</p> 
	<p>第1波の上昇幅を第3波の底に加えた水準。</p>	<p>第1波の始点から押し目である第2波までの上昇を、同押し目底に加えた水準。</p>

当該資料は一般的なチャートの見方を紹介するものであり、売買の判断など、実際のお取引に関してはお客様ご自身の判断で行ってください。


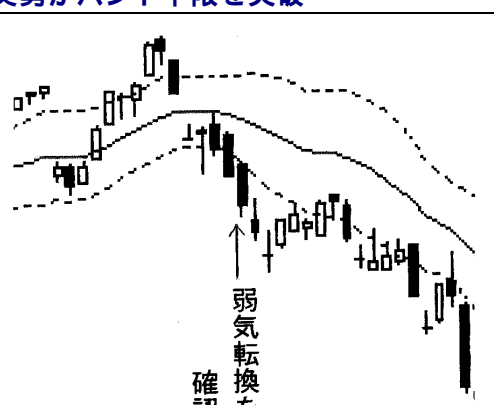
ボリンジャーバンド

移動平均線を中心として、上下に標準偏差によって求めたバンド（帯）を記し、統計的に相場がこのバンド内での変動（ボラティリティ）にとどまる可能性が高いという考え方にもとづいて、売買スタンスを判断するものです。バンド上下限への接近で逆張りのに用いたり、また、バンドの相場実勢へ向けた縮小・接近で目先の相場に新しい動きが発生しようとしている兆候を探ることができます。

逆張りポイント

	<p>実勢がバンド下限で反発(上昇トレンド) 上昇トレンド(平均線が上向き)において、実勢がバンド下限水準で反発しており、押し目終了、買いポイントを暗示。</p>
	<p>実勢がバンド上限で反落(上昇トレンド) 上昇トレンド(平均線が上向き)において、実勢がバンド上限水準で反落しており、目先の修正安(短期的な下落)を暗示、転売のポイント。</p> <p>実勢がバンド上限で反落(下降トレンド) 下降トレンド(平均線が下向き)において、実勢がバンド上限水準で反落しており、戻りの限界を示唆、売りポイント。</p> <p>実勢がバンド下限で反発(下降トレンド) 下降トレンド(平均線が下向き)において、実勢がバンド下限水準で反発しており、目先の戻り(短期的な反発)を暗示、買い戻しのポイント。</p>

基調転換の確認

<p>実勢がバンド上限を突破</p> 	<p>実勢がバンド下限を突破</p> 
<p>下降トレンドが続いていたが、実勢が反発、平均線を上抜いた後、バンド上限をも突破しており、強基調への転換を確認。</p>	<p>上昇トレンドが続いていたが、実勢が平均線を下抜いた後、バンド下限をも突破しており、弱基調への転換が鮮明化する。</p>

当該資料は一般的なチャートの見方を紹介するものであり、売買の判断など、実際のお取引に関してはお客様ご自身の判断で行ってください。

エンベロープ

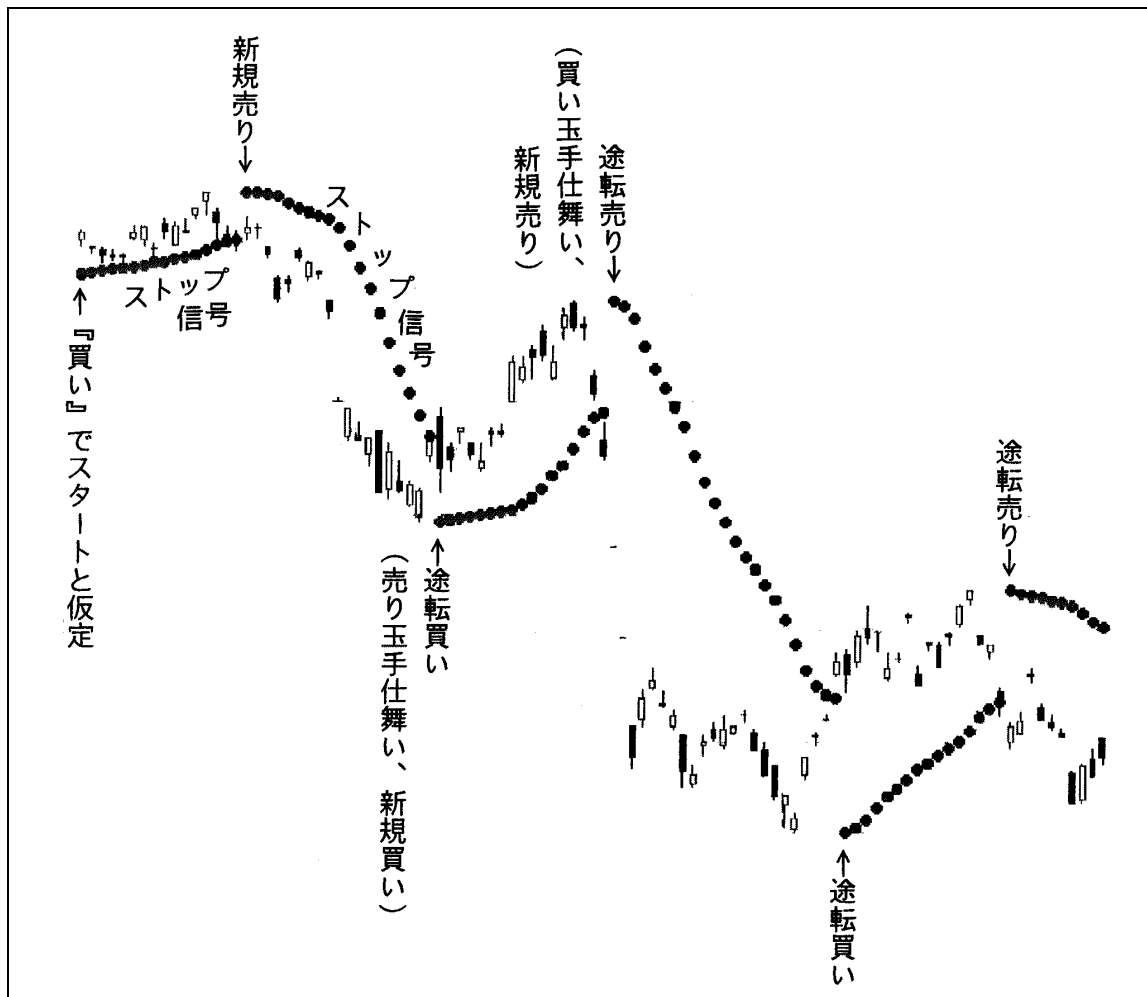
移動平均線の上下に、平均線からの任意の乖離(%)水準を線で記したものです。移動平均線を中心にバンド(帯)状で示されます。相場の動きと合わせて逆張りの使ったり、また、相場がバンドを飛び越えることで新トレンド発生の可能性を探ったりします。

逆張りポイント	
	<p>実勢がバンド下限で反発(上昇トレンド) 上昇トレンド(平均線が上向き)において、実勢がバンド下限水準で反発しており、押目終了、買いポイントを暗示。</p>
	<p>実勢がバンド上限で反落(上昇トレンド) 上昇トレンド(平均線が上向き)において、実勢がバンド上限水準で反落しており、目先の修正安(短期的な下落)を暗示、転売のポイント。</p>
	<p>実勢がバンド上限で反落(下降トレンド) 下降トレンド(平均線が下向き)において、実勢がバンド上限水準で反落しており、戻りの限界を示唆、売りポイント。</p>
	<p>実勢がバンド下限で反発(下降トレンド) 下降トレンド(平均線が下向き)において、実勢がバンド下限水準で反発しており、目先の戻り(短期的な反発)を暗示、買い戻しのポイント。</p>
基調転換の確認	
<p>実勢がバンド上限を突破</p>	<p>実勢がバンド下限を突破</p>
<p>下降トレンドが続いていたが、実勢が反発、平均線を上抜いた後、バンド上限をも突破しており、強基調への転換を確認。</p>	<p>上昇トレンドが続いていたが、実勢が平均線を下抜いた後、バンド下限をも突破しており、弱基調への転換が鮮明化する。</p>

当該資料は一般的なチャートの見方を紹介するものであり、売買の判断など、実際のお取引に関してはお客様ご自身の判断で行ってください。

パラボリックプライスシステム

過去の価格を平準化した数値にもとづき、売り買いのタイミングを探るものです。これは常に買いまたは売りの建玉をもつ、途転商いのテクニカル手法です。大きなトレンドのある相場では有効ですが、保合い相場では効果が薄いという特徴があります。



実勢がストップ信号を上抜く

既存の売り建玉を手仕舞い、新規に買い玉を建てる。(実勢より下の水準でスタートした新しいストップ信号を、将来、実勢が下抜いた時点で、売りに転じる。)

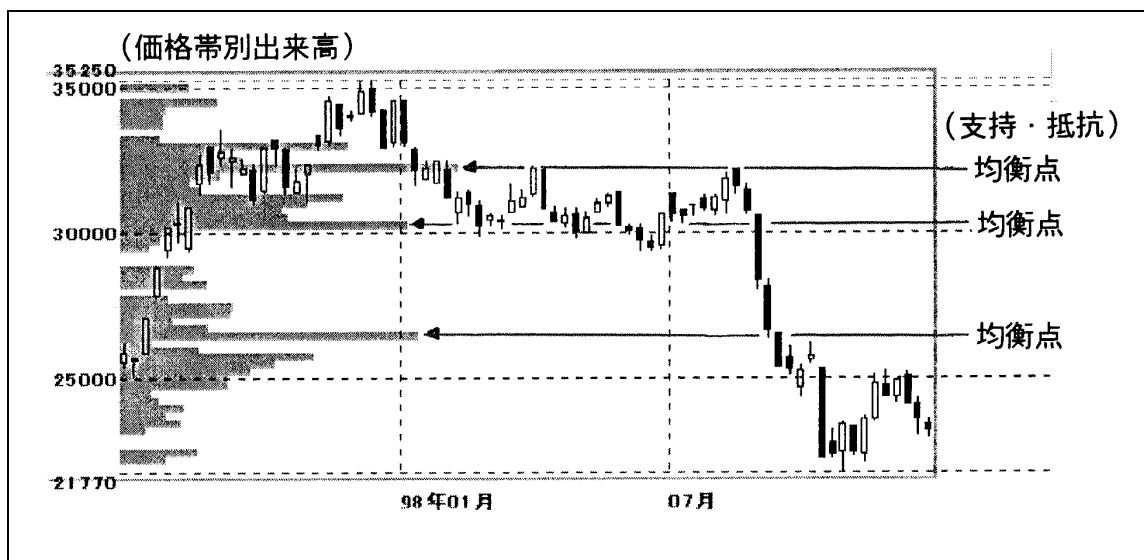
実勢がストップ信号を下抜く

既存の買い建玉を手仕舞い、新規に売り玉を建てる。(実勢より上の水準でスタートした新しいストップ信号を、将来、実勢が上抜いた時点で、買いに転じる。)

当該資料は一般的なチャートの見方を紹介するものであり、売買の判断など、実際のお取引に関してはお客様ご自身の判断で行ってください。

価格帯別出来高

価格帯別の出来高を分析することで、市場の均衡点がどこにあるかを探ろうとするものです。ある特定の価格帯に取引が集中すると「保合」という形で価格は均衡状態をつくりまします。しばしば、この保合圏を抜けると、玉整理とともに売り買いがバランスするところまで価格が変動することがありますが、そこでは売買（出来高）が膨らみ、新しい均衡点（支持あるいは抵抗）が作られる傾向があります。このテクニカル指標は、売買注文時の目安になるだけでなく、支持や抵抗など相場の節目を発見するツールともなります。

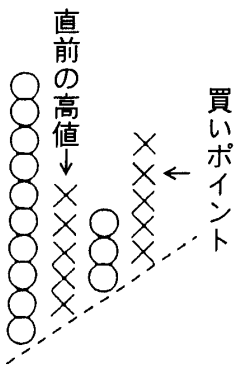
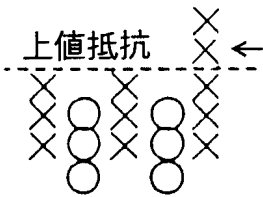
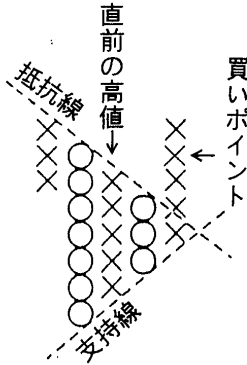
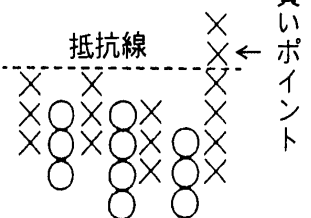
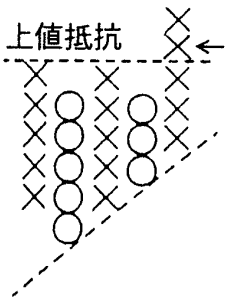
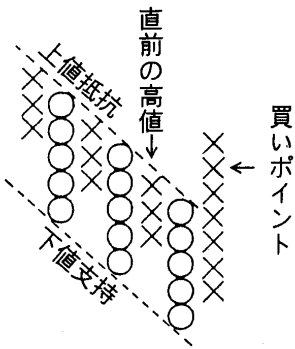


当該資料は一般的なチャートの見方を紹介するものであり、売買の判断など、実際のお取引に関してはお客様ご自身の判断で行ってください。

ポイント&フィギュア(P & F)

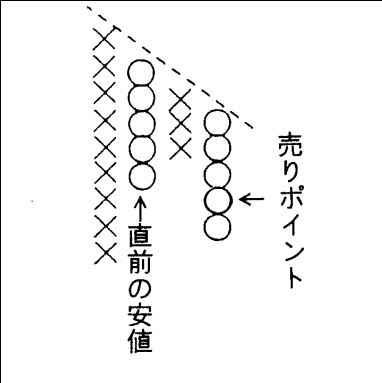
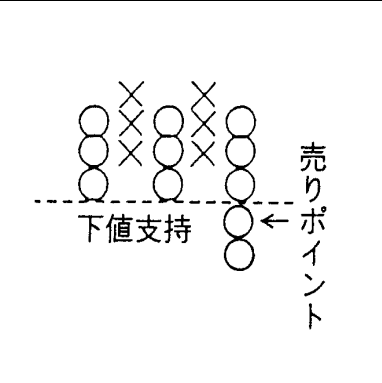
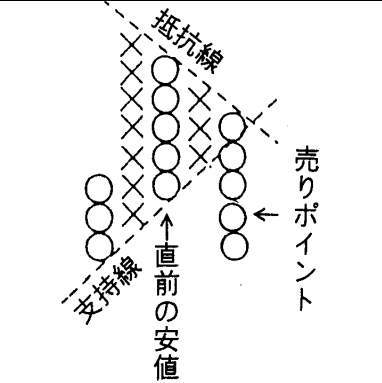
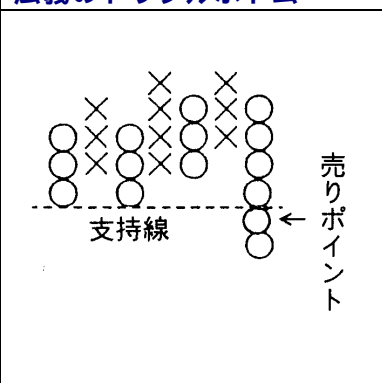
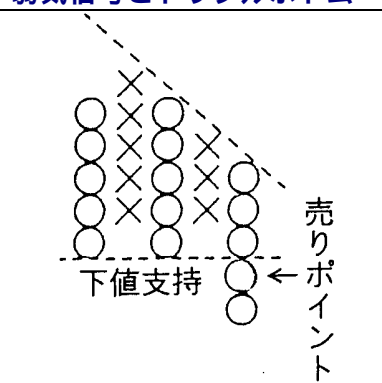
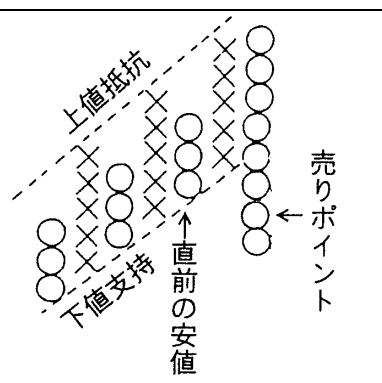
時間の流れと出来高の考え方から離れて、相場が作るトレンドをより重視した分析手法です。あらかじめ1ポイントあたりの値幅(転換額)を設定し、1ポイント分相場が動いたら、上昇であれば×印を、逆に下落であれば○印(または△印)を使って相場の動きを示します。サポートラインを使ったトレンド分析、トリプルトップなどの独自パターン分析などの他、値幅の計算により、将来トレンドが発生した場合の目標値を求めることができます。

強気の代表的なパターン

強気信号	トリプルトップ	強気の三角形
 <p>直前の高値 買いポイント</p>	 <p>上値抵抗 買いポイント</p>	 <p>直前の高値 抵抗線 支持線 買いポイント</p>
<p>底値を切り上げながら、直前の高値を上抜く。</p>	<p>上値抵抗ラインに3つ並んだ高値を上抜く。</p>	<p>抵抗線と支持線でペナント(三角保合い)を形成した後、直前の高値を上抜く。</p>
広義のトリプルトップ	強気信号とトリプルトップ	逆転上昇
 <p>抵抗線 買いポイント</p>	 <p>上値抵抗 買いポイント</p>	 <p>直前の高値 上値抵抗 下値支持 買いポイント</p>
<p>高値水準が不揃いな場合、直前の高値だけでなく抵抗ラインを上抜けば買い。</p>	<p>底値を切り上げながら、上値抵抗ラインに3つ並んだ高値を上抜く。(強気信号とトリプルトップが同時に出現。)</p>	<p>上値抵抗、下値支持ともに右下がりの弱気パターンから、上値抵抗、さらに直前の高値も上抜いて強気に転換。</p>

当該資料は一般的なチャートの見方を紹介するものであり、売買の判断など、実際のお取引に関してはお客様ご自身の判断で行ってください。

弱気の代表的なパターン

弱気信号	トリプルボトム	弱気の三角形
		
上値を切り下げながら、直前の安値を下抜く。	下値支持ラインに3つ並んだ安値を下抜く。	抵抗線と支持線でペナント（三角保合い）を形成した後、直前の安値を下抜く。
広義のトリプルボトム	弱気信号とトリプルボトム	変型トリプルボトム
		
安値水準が不揃いな場合、直前の安値だけでなく支持ラインを下抜けば売り。	上値を切り下げながら、下値支持ラインに3つ並んだ安値を下抜く。（弱気信号とトリプルボトムが同時に出現。）	上値抵抗、下値支持ともに右上がりの強気パターンから、下値支持、さらに直前の安値も下抜いて弱気に転換。

目標値の計算方法

保合い期間の長さから、目標値を算出

上値目標（保合いを上放れた場合）

保合い期間中の最安値 + 保合い相場の行数 × 単位ポイント値幅 × 3

下値目標（保合いを下放れた場合）

保合い期間中の最高値 - 保合い相場の行数 × 単位ポイント値幅 × 3

保合いを放れた後の、最初の上昇幅（または下降幅）から目標値を算出

上値目標（保合いを上放れた場合）

保合い期間中の最安値 + 上放れ後の最初の上昇幅 × 単位ポイント値幅 × 3

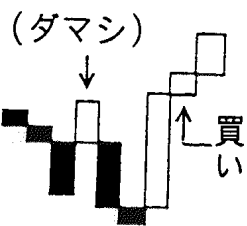
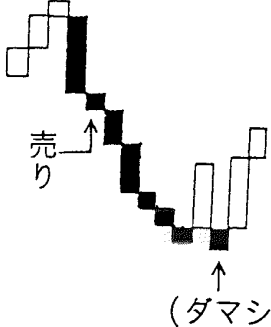
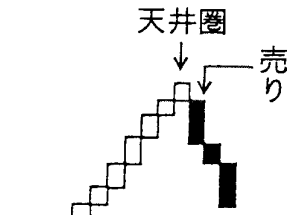
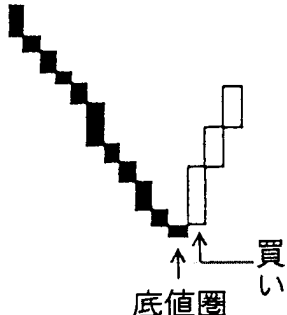
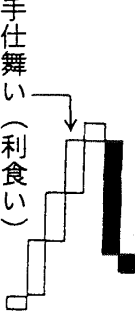
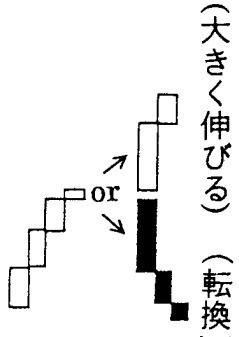
下値目標（保合いを下放れた場合）

保合い期間中の最高値 - 下放れ後の最初の下降幅 × 単位ポイント値幅 × 3

当該資料は一般的なチャートの見方を紹介するものであり、売買の判断など、実際のお取引に関してはお客様ご自身の判断で行ってください。

新値足

新値足は大引値が新値を更新するたびに新しい足を加えていくというものです。時間の流れを考慮していないため、目先の小さな変動に惑わされずにトレンドを追うことができます。一般には三段抜き新値足がよく使われますが、見方としては3本前の高値を上回ったり、下回ったりした際の陽転（陰転）を売買サインとします。どちらかと言うと短期よりも中長期のトレンドをとらえるのに適しており、10本以上、同じ方向で線が連続すると、相場の転換点接近が近いという見方もあります。

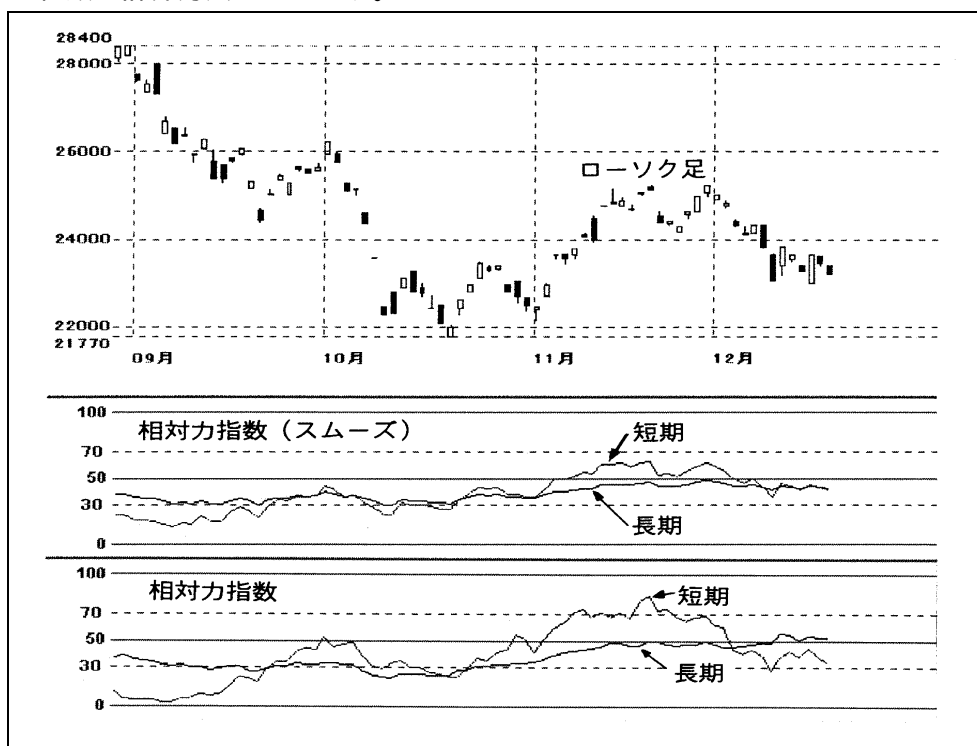
陽転	陰転	陽線が10本以上続く
		
陽転は買い。なお、陽転後2本目の陽線が出るのを待って買くと、ダマシが少ない。	陰転は売り。なお、陰転後2本目の陰線が出るのを待って売ると、ダマシが少ない。	陽線が10本以上続いた相場は天井圏と見る。なお、その後の陰転は、売りのシグナル。
陰線が10本以上続く	長い線が3本続く	新値の幅が小さくなる
		
陰線が10本以上続いた相場は底値圏と見る。なお、その後の陽転は、買いのシグナル。	長い陽線3本は手仕舞い売り（利食い売り）のシグナル。また、長い陰線3本は買い戻し（利食い買い）。	新値の幅が小さくなった場合は、転換間近、あるいは大きく伸びる前兆。

当該資料は一般的なチャートの見方を紹介するものであり、売買の判断など、実際のお取引に関してはお客様ご自身の判断で行ってください。

相対力指数 (RSI)

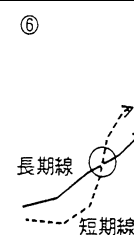
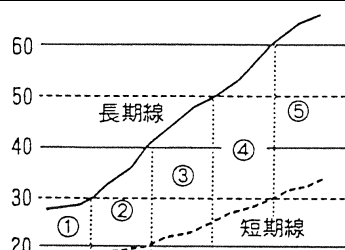
相場の買われ過ぎや売られ過ぎを示す代表的な逆張り指標のひとつです。逆張りとは相場の近い将来の反発や反落を見越して、いま現れている相場の方向とは逆のポジションを持つという、目先のトレンドに逆らった売買スタンスと言えます。特に保合時にシグナルの信頼性が増すのが特徴です。一般的に指数が 30 以下なら下げ相場の反発と上昇の可能性を、また 70 以上なら下落の可能性を示します。

なお、相対力指数には、前日時点の数値に対して 1 日分の価格データを加算して計算することにより、滑らかな線を描くスムーズRSIと、指定期間日数分の価格データから計算する 2 種類の計算方法があります。



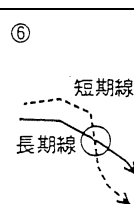
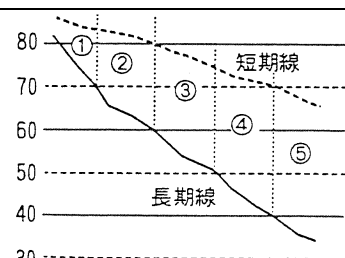
買いのシグナル

- 長期線が 30 以下
- 長期線が 30 台で短期線が 20 以下
- 長期線が 40 台で短期線が 25 以下
- 長期線が 50 台で短期線が 30 以下
- 長期線が 60 台で短期線が 35 以下
- ゴールデン・クロス (50 近辺を除く)



売りのシグナル

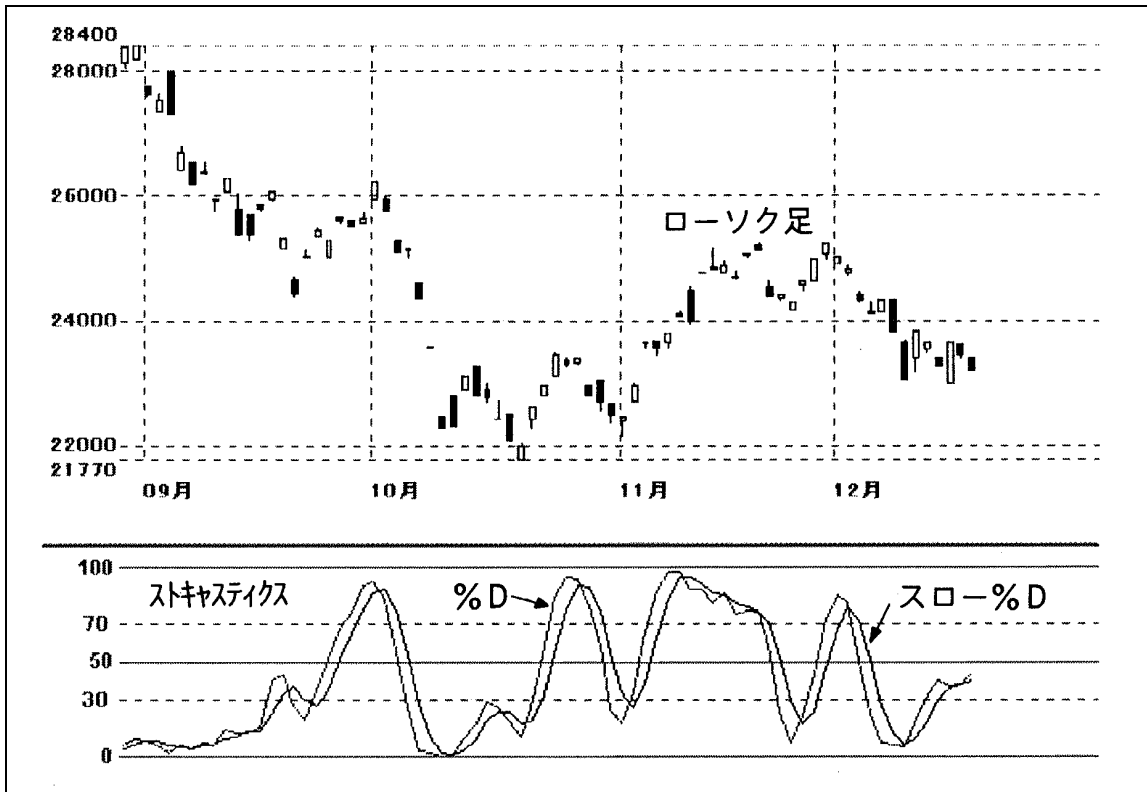
- 長期線が 70 以上
- 長期線が 60 台で短期線が 80 以上
- 長期線が 50 台で短期線が 75 以上
- 長期線が 40 台で短期線が 70 以上
- 長期線が 30 台で短期線が 65 以上
- デッド・クロス (50 近辺を除く)



当該資料は一般的なチャートの見方を紹介するものであり、売買の判断など、実際のお取引に関してはお客様ご自身の判断で行ってください。

ストキャスティクス

相対力指数と同じ逆張り指標のひとつで、現在の値段水準が過去の高安値で作られる値幅の中で、上位なのか下位なのか、どの水準に位置しているのかを示したものです。%Kラインと%Dライン、あるいは%Dラインとスロー%Dライン(%SD:%Dの動きをさらに滑らかにしたもの)の、2本の線の動きから転換点を探っていきます。一般的な見方は%Dの30以下は安値圏、70以上は高値圏、そして%Dが0(ゼロ)に接近・到達すれば上昇転換間近、100に接近・到達すれば下降転換間近と判断します。



安値圏(買いシグナル)

%Dが30以下は安値圏。(この水準で%Dと%SDが交差すれば基本的に買いシグナル)

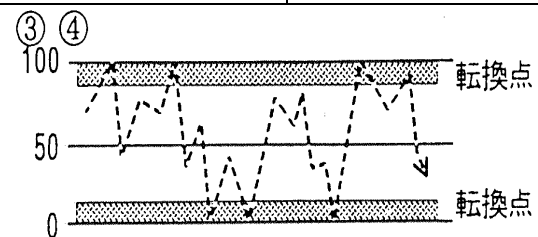
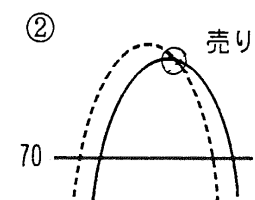
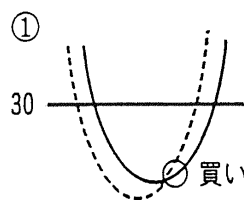
高値圏(売りシグナル)

%Dが70以上は高値圏。(この水準で%Dと%SDが交差すれば基本的に売りシグナル)

相場の転換

%Dが0に接近・到達すれば相場は上昇への転換間近。

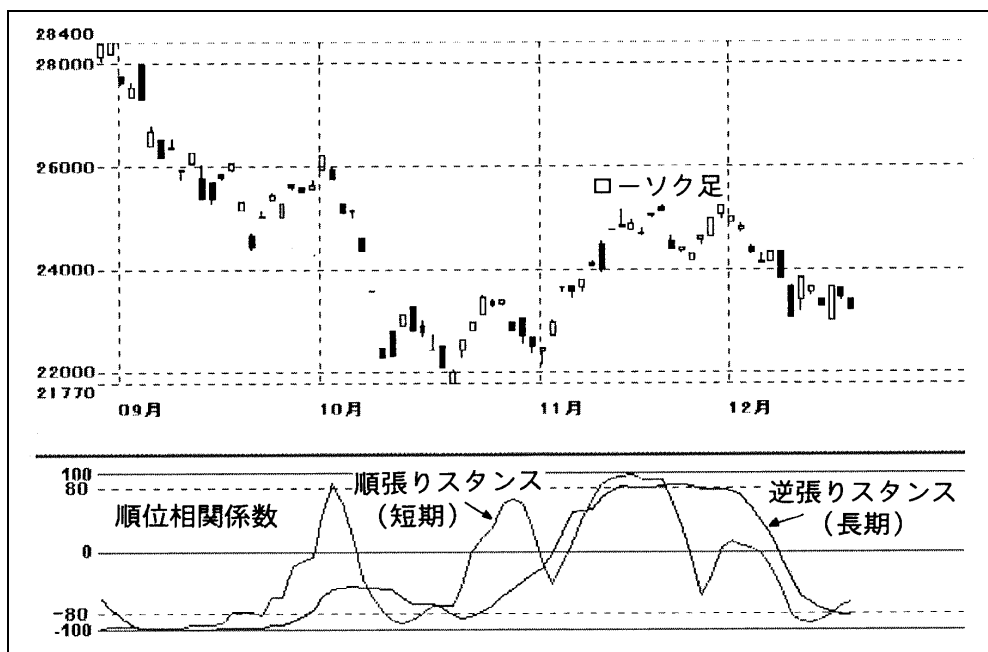
%Dが100に接近・到達すれば相場は下降への転換間近。



当該資料は一般的なチャートの見方を紹介するものであり、売買の判断など、実際のお取引に関してはお客様ご自身の判断で行ってください。

順位相関係数 (RCI)

価格と時間の相関関係から、トレンドと相場の転換を探る指標で、一般にRCIとも呼ばれます。順張りの使い方では指数がマイナスからプラスに入ったら買いシグナル。逆のケースが売りとなります。また、逆張りサインとして用いる場合、売りならば指数がプラス側の 100 ポイント近辺から下降に転じた場合が売りシグナルと見るのが一般的です。



順張りスタンス (短期)

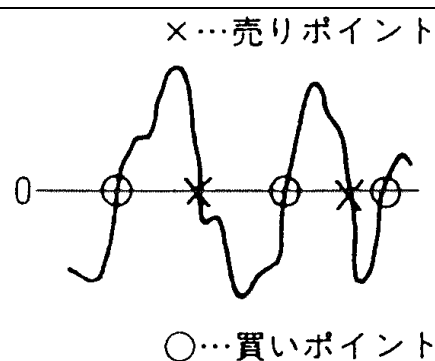
計算期間に、相場のサイクル (上昇期間と下降期間の合計) の 4 分の 1 程度の日数を用いる事により、上昇・下降トレンド開始のポイントを発見する。

買いシグナル

RCI がマイナスからプラスに入ったら買いシグナル。

売りシグナル

RCI がプラスからマイナスに入ったら、売りシグナル。



逆張りスタンス (長期)

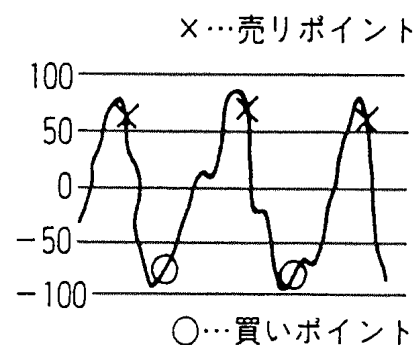
計算期間に、相場のサイクル (上昇期間と下降期間の合計) の 2 分の 1 程度の日数を用いる事により、上昇・下降へ転換するポイントを発見する。

買いシグナル

マイナス 100 近辺で RCI が下降から上昇に転じたら買いシグナル。

売りシグナル

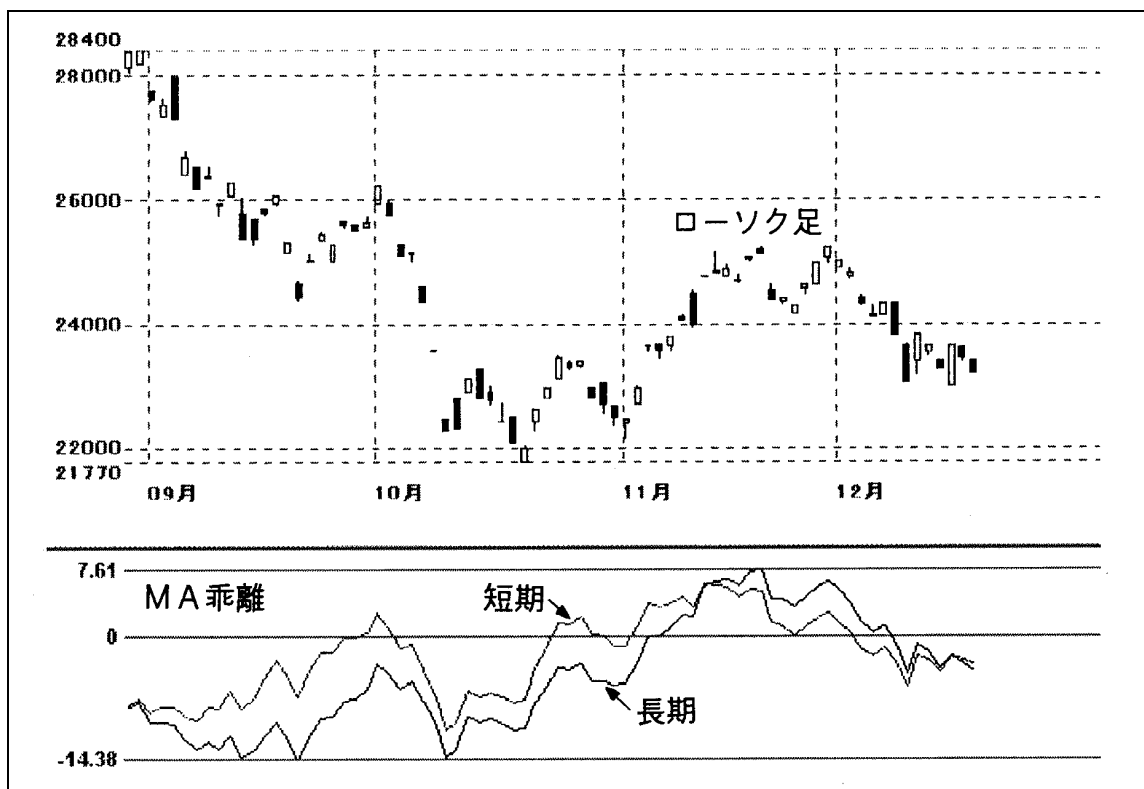
プラス 100 近辺で RCI が上昇から下降に転じたら、売りシグナル。



当該資料は一般的なチャートの見方を紹介するものであり、売買の判断など、実際のお取引に関してはお客様ご自身の判断で行ってください。

移動平均線乖離 (MA 乖離)

任意の期間で算出される移動平均の数値は、その計算期間における市場参加者の平均売買コストと見ることができます。上昇相場にある時、相場は移動平均線から大幅に上方乖離するケースが見られますが、この状態は、買い手の平均コストを超えて相場が推移していることになり、利食いとそれに伴う反落が起きる可能性があります。移動平均線からの相場の乖離を見ることによって、市場の買われ過ぎ、或いは売られ過ぎといった過熱度を推し測ることができます。ひとつの逆張り指標と言っても良いでしょう。

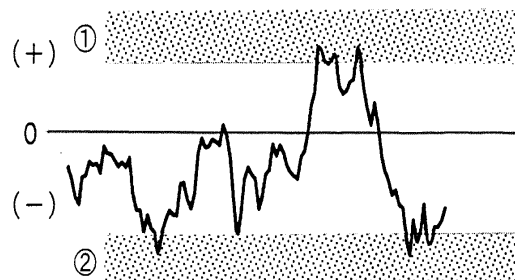


売りシグナル

実勢が移動平均線に比べ大きくプラスに乖離、過去の傾向から最大と見られる水準にあり、買われ過ぎ、修正安を示唆。

買いシグナル

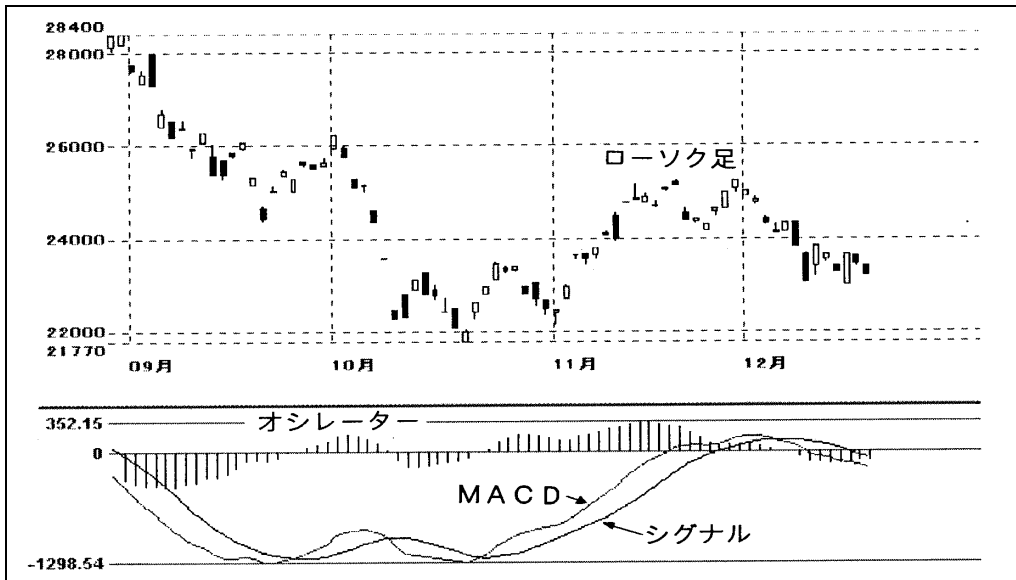
実勢が移動平均線に比べ大きくマイナスに乖離、過去の傾向から最小と見られる水準にあり、売られ過ぎ、修正高を示唆。



当該資料は一般的なチャートの見方を紹介するものであり、売買の判断など、実際のお取引に関してはお客様ご自身の判断で行ってください。

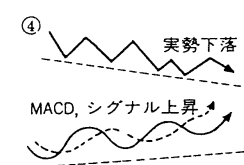
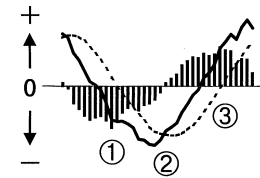
MACD

長短 2 本の指数平滑移動平均線を用いて、両平均線の方向性や乖離、その絡み具合に注目したもので、トレンドを探る指標のひとつです。2 本の平均線の値の差をMACD、MACDの平均値をシグナル、MACDとシグナルの差をオシレーターと呼びます。例えば買いシグナルとなるのは、オシレーターの底打ち、MACDがシグナルを上抜いた時、MACDとシグナルがゼロラインを上回った時とされます。MACD、シグナル、オシレーターの動きを総合的に判断することがポイントです。



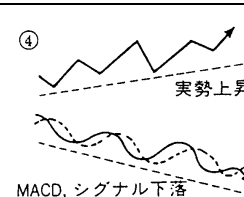
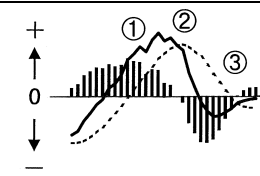
買いシグナル

オシレーターが底打ち。
MACDがシグナルを上抜く。(オシレーターがマイナスからプラスに転じる)
その後、MACDとシグナルがゼロのラインを上回れば、さらに強い買いシグナル。
実勢が下落しているにもかかわらず、MACDおよびシグナルが逆に上昇している場合は、底値圏を暗示。



売りシグナル

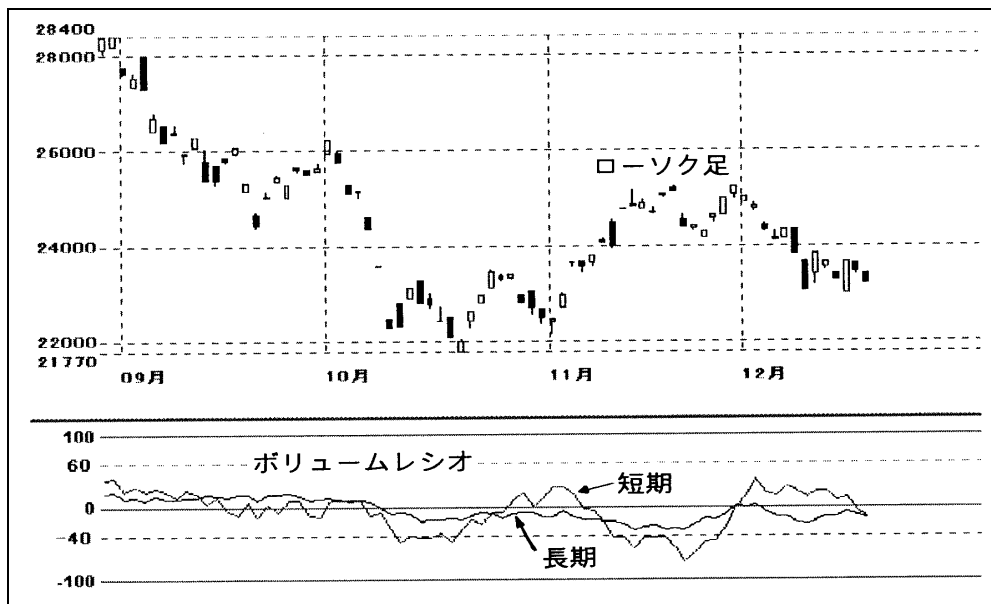
オシレーターが天井打ち。
MACDがシグナルを下抜く。(オシレーターがプラスからマイナスに転じる)
その後、MACDとシグナルがゼロのラインを下回れば、さらに強い売りシグナル。
実勢が上昇しているにもかかわらず、MACDおよびシグナルが逆に下落している場合は、天井圏を暗示。



当該資料は一般的なチャートの見方を紹介するものであり、売買の判断など、実際のお取引に関してはお客様ご自身の判断で行ってください。

ボリュームレシオ(和光VR)

和光証券が開発した出来高分析の手法で、「相場の波動はエネルギーの発散と蓄積の循環によって描かれる」という考え方をもとにしています。日々の始値と終値、あるいは週の始値と終値とを比較して、相場が安かったか保合いならば、この日(週)の出来高を蓄積エネルギーとし、逆に高ければ発散エネルギーととらえて、独自の数値を算出するもので、算出した数値の水準や変化から相場の天底を探ります。



高値圏と底値圏

<p>中、長期的に見て、実勢が天井圏にあるときVRはピークを、底値圏にあるときVRはボトムをつける。</p>	<p>一般的にマイナス 40~60%は底値圏のシグナル プラス 60%前後は天井圏のシグナル。プラス 80%を超えると天井の確率はきわめて高い。</p>

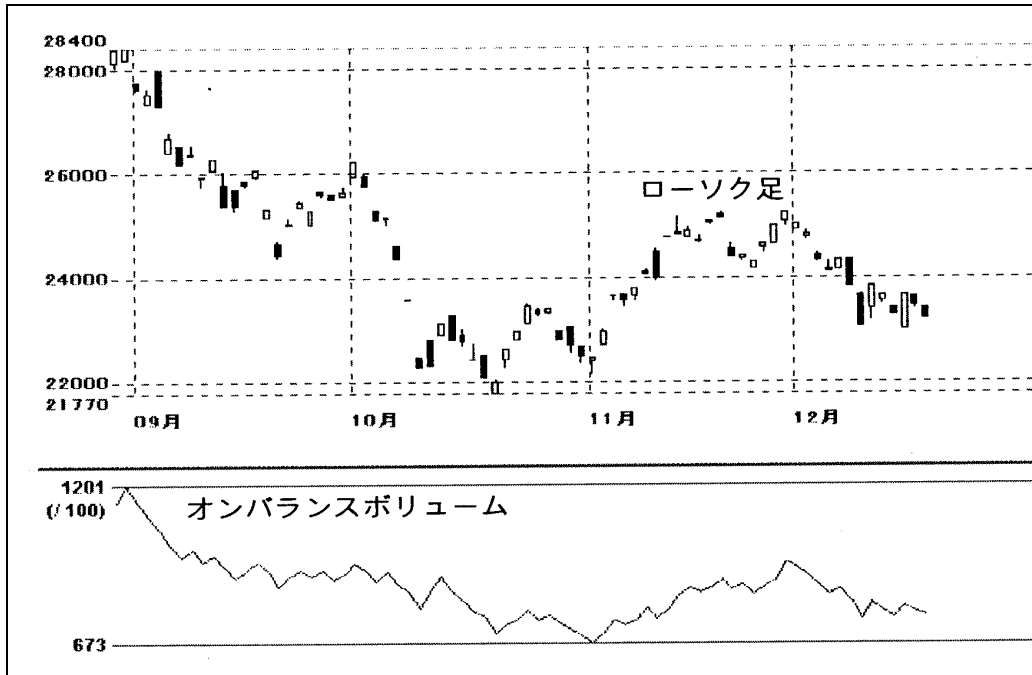
上昇相場


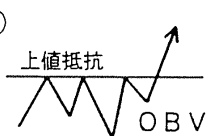
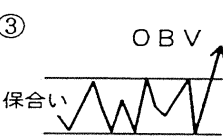
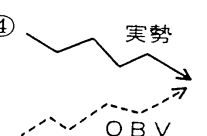
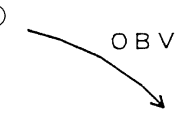
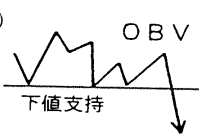
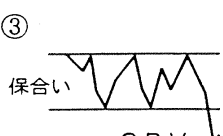
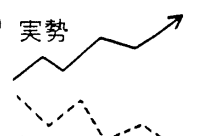
<p>出来高急増でVRが低水準から一気に上昇した場合、上昇相場のスタート(の場合の例外) 実勢が上昇、VRも上昇トレンドでマイナスからプラスに転じた場合、実勢はさらに一段高へ。</p>		
--	--	--

当該資料は一般的なチャートの見方を紹介するものであり、売買の判断など、実際のお取引に関してはお客様ご自身の判断で行ってください。

オンバランスボリューム(OBV)

相場が動く時は、その前に出来高に変化が現れるとの考え方に基づいた指標です。例えば相場が上昇傾向にある時に持続的な出来高の増加があれば、市場は相場のトレンドを追い、買い方優勢の地合いにあると見ることができます。一方、出来高の増加がとまったり、減少に転じ始めたりすると、一転して反落の兆候が出始めた可能性が高いということになります。この指標は市場全体の大きな趨勢の変化でとらえることが大切です。

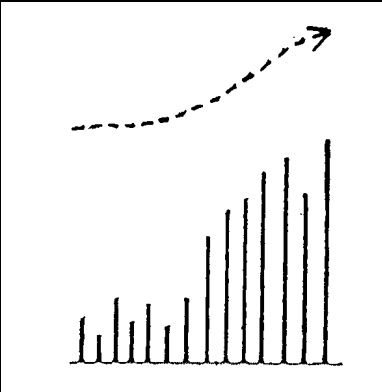
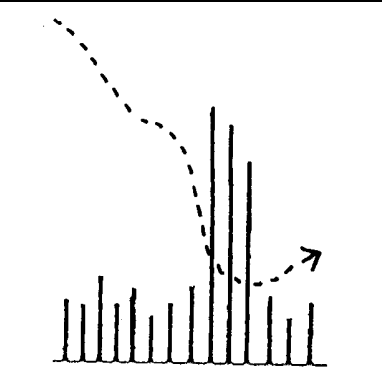
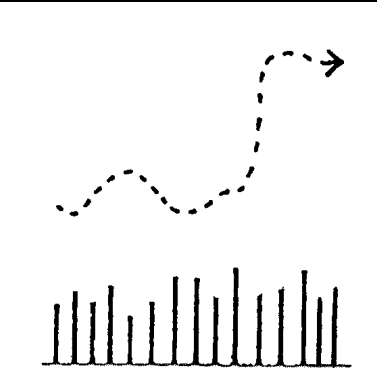
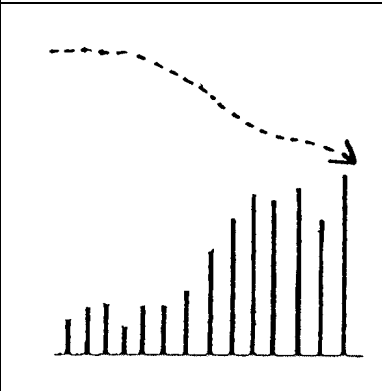
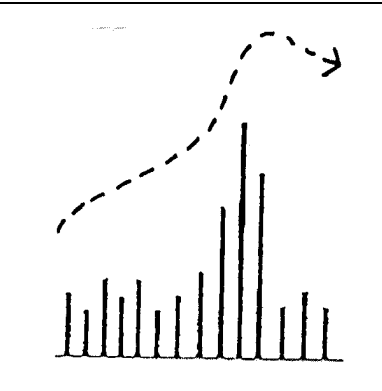
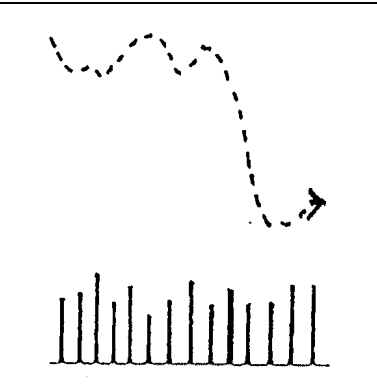


上昇パターン OBVが上昇。 OBVが上値抵抗線を上回る。 OBVが保合いを上放れる。 実勢が下降しながらOBVが上昇。 (将来的に価格上昇へ転換)	① 	② 
	③ 	④ 
下降パターン OBVが下降。 OBVが下値支持線を下回る。 OBVが保合いを下放れる。 実勢が上昇しながらOBVが下降。 (将来的に価格下落へ転換)	① 	② 
	③ 	④ 

当該資料は一般的なチャートの見方を紹介するものであり、売買の判断など、実際のお取引に関してはお客様ご自身の判断で行ってください。

出来高

出来高は一日に成立した売買約定の枚数で、価格変動（実勢の動き）と出来高を総合的に分析する事により、市場の趨勢を判断することができます。例えば、上げ相場で出来高が増加している場合は、すなわち市場は買い人気に傾いていると判断できます。また、上げ相場最終局面での出来高の変化は、玉整理の一巡、基調転換の可能性を示す場合があります。このように、出来高は市場参加者の動きを知るバロメーターとも言えます。

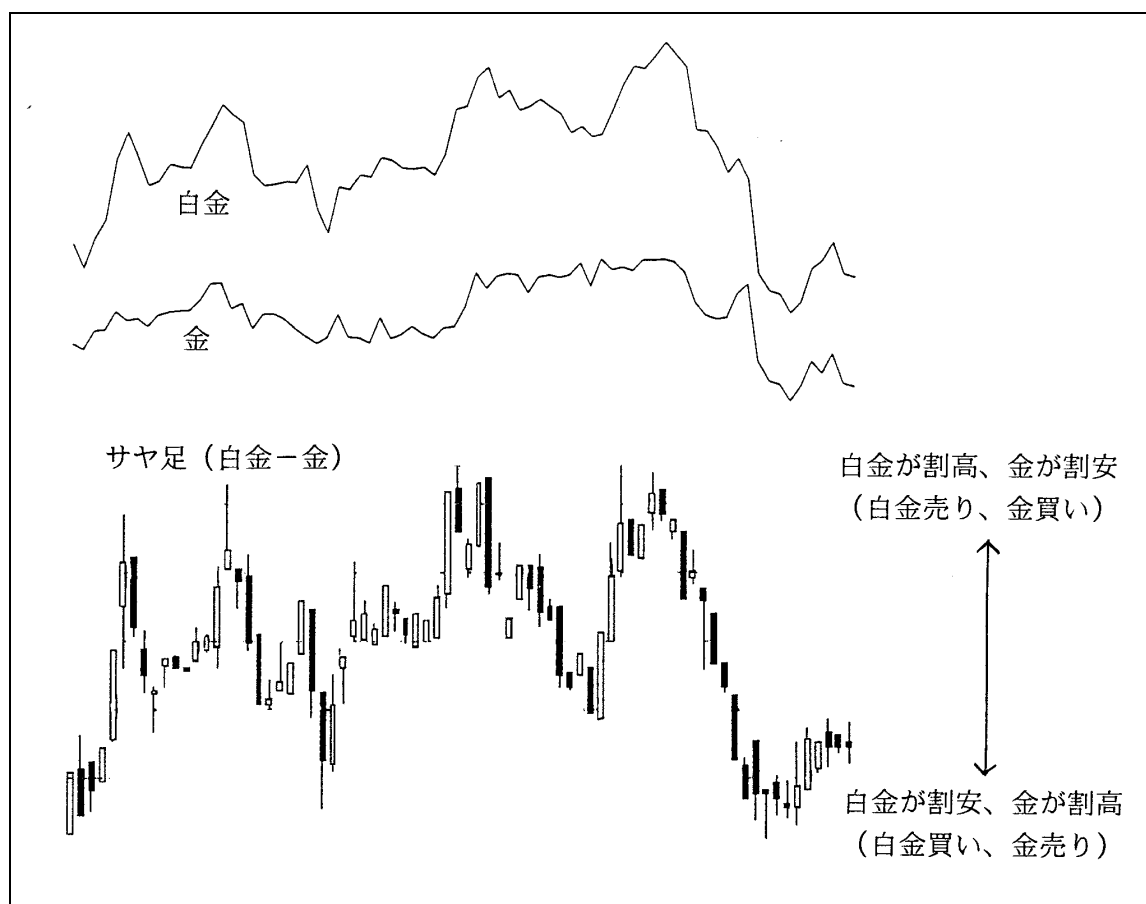
買いシグナル（棒線：出来高、点線：実勢）		
		
持続的な出来高増加を伴う上げ相場は、基本的に買い人気、強い相場を示す。	下げ過程最終局面での出来高急増とその後の減少は、投げ一巡から強基調へ転換の可能性を示す。	実勢が保合いから上放れたにもかかわらず、出来高に変化が見られない場合、踏みによる一段高の可能性あり。
売りシグナル（棒線：出来高、点線：実勢）		
		
持続的な出来高増加を伴う下げ相場は、基本的に売り人気、弱い相場を示す。	上げ過程最終局面での出来高急増とその後の減少は、踏み一巡から弱基調へ転換の可能性を示す。	実勢が保合いから下放れたにもかかわらず、出来高に変化が見られない場合、投げによる一段安の可能性あり。

当該資料は一般的なチャートの見方を紹介するものであり、売買の判断など、実際のお取引に関してはお客様ご自身の判断で行ってください。

サヤチャート

例えば金と銀、金と白金、大豆とトウモロコシなどのように、銘柄間に「割安を売って割高を買う」というような裁定関係が認められる場合、2銘柄を同時に比較する事によって価格分析を行うことができます。また、サヤ足（サヤの値でローソク足を描画）は2銘柄間のサヤ（価格差）の変化をローソク足の形に転換、ビジュアル化したもので、割安、割高の度合い、サヤの変化の傾向を探る際にも使われます。

（注）サヤの値でローソク足を描画する際、計算値が0またはマイナスになる場合が含まれている時は、システム上の必要性から、実際の2銘柄間のサヤ（価格差）の数値ではなく、同数値に一定の値を加算した数値を使用してローソク足を作成しています。

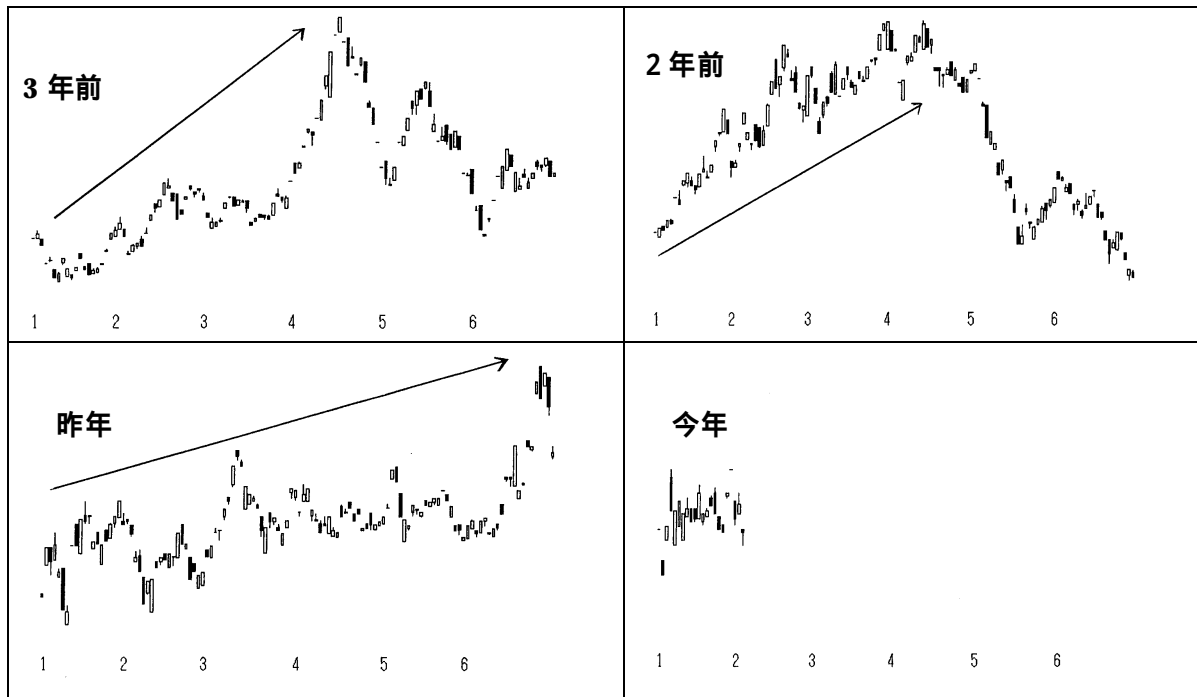


当該資料は一般的なチャートの見方を紹介するものであり、売買の判断など、実際のお取引に関してはお客様ご自身の判断で行ってください。

季節変動習性

商品によっては、その生産（生育）の時期や、需要の増加あるいは減退する時期が決まっているため、価格変動において季節的習性を示す物があります。

季節変動習性のチャートは、現在取引されている限月と同じ月のチャート、過去4年分を比較する事により、その商品の季節変動習性を分析する事ができます。



当該資料は一般的なチャートの見方を紹介するものであり、売買の判断など、実際のお取引に関してはお客様ご自身の判断で行ってください。